

河川からの空間再生に関する研究—日本橋川を例として—

A study on regeneration of urban space from the river—A Case of the Nihonbashi River—

日本大学 学生会員 ○木村美瑛子
 日本大学 学生会員 小林恭介
 日本大学教授 正会員 吉川勝秀

1. 研究背景と目的

「日本橋の上に青空を」という提言などもあり、東京オリンピックの際に日本橋川の上空に設けられた高架の首都高速道路撤去の議論が多くなされるようになった。この議論において最も重要視されているのは高速道路の撤去・再建、都市景観再構築、建設費用等の視点であり、撤去区間は日本橋地区に限られている。

本研究では、議論から抜け落ちていと考えられる、①川を如何に再生するか、②川沿いの都市を如何に整備するか、③川周辺を如何に有効に利用するかについて検討をする。

2. 研究内容

1) 歴史的な経過の解明

明治時代から現在のものまでの地図や航空写真を有効に用い、歴史的変遷を視覚的に把握した。

2) 現状把握

日本橋川の現地調査を行い、川沿いに歩ける箇所と歩けない箇所を地図上に整理する等のことを行った。

3. 研究結果

1) 歴史的な変遷

図-1は明治時代の日本橋川周辺を示した図である。川沿いの色の濃い部分が河岸を示すが、多くの河岸が見受けられ、河川が人々に利用されていたことが分かる。



図-1 明治40年の日本橋川周辺の図

図-1と写真-1(左)(右)を比較することにより、年が経過するにつれ川沿いに建物が多くなり、河岸が減少している様子が分かる。また写真-1(左)昭和22年と(右)昭和38年の航空写真を比較すると、高速道路が日本橋川に建設され、川が覆われてしまったことが分かる。これにより、人が川に近づきにくくなってしまったと考えられる。

キーワード 都市河川 河川空間利用 都市再生



写真-1 (左)昭和22年 (右)昭和38年の航空写真

2) 現地調査

現地調査より、図-2のような現況図を作成した。この図では、川沿いに歩けない箇所を黒線で示した。その結果、川沿いに歩けない箇所が日本橋川全延長の約七割もあることが分かった。



図-2 現況図

川沿いに歩けない箇所の大部分は、写真-2(左)に示すような直立護岸の堤防や、川に迫ってビルが建ち並んでいる。一方、川沿いに歩ける箇所においては、常盤橋公園のように、水辺と触れ合える憩いの場として利用されている橋詰め公園や、写真-2(右)に示す飯田橋のアイガーデンのように、川に切迫して建物を建てることなく、川沿いに広々とした空間や緑が存在する所もある。



写真-2(左)川沿いの歩けない箇所 (右)川沿いに歩ける箇所

写真-3(右)や写真-4(右)のように、高速道路が撤去したら、どのような空間が生まれるのかを常盤橋・日本橋を例にイメージとして示した。現地調査において、どちらも川に近づくことが出来る箇所を対象とした。



写真-3 (左)日本橋の現状写真(右)日本橋の高架を撤去したイメージ



写真-4(左)常盤橋の現状写真(右)常盤橋の高架を撤去したイメージ

4. 考察

- ・歴史的変遷、現況図から、都市河川が人々の生活と断絶している箇所が大部分であることが分かった。
- ・イメージ図から、高架を撤去すると開けた空間になるが、利用の面から、直立護岸等により大いに活用出来ないで、周辺都市の空間利用も同時に考える必要がある。
- ・現地調査から、川沿いに歩け、広々とした川辺空間となっている飯田橋のアイガーデン付近は現在議論されている撤去区間外であるが、魅力的な空間であるため、この区間の高速道路撤去も必要ではないかと考えられる。(写真-4参照)
- ・日本橋上空の高架撤去は経済効果もあり、また空間の価値が高まると考えられているが、同時に人々が水辺に近づく空間が必要であると考えられ、このような例として、写真-5に示す大阪・道頓堀川では、川にボードウォークを設置し、川と人とが触れ合える空間を創出している。



写真-5 (左) 飯田橋の現状 (右) 飯田橋から高架を撤去したイメージ



写真-6 大阪・道頓堀川のボードウォークの様子

- ・人々が水辺に近づく空間を創出する手段としては、

手段1) ボードウォークの設置

ボードウォークの設置に際しては、潮の満ち干を考慮してボードウォークを高めに設置する、あるいは、隅田川への出口(神田川の出口と日本橋川の出口)に水門を設置し、水位を一定にすることによって、水面に出来るだけ近い高さに設置する場合が考えられる。前述の道頓堀川の場合では、道頓堀川の上下側に水門を設置し、水量をコントロールしている。



写真-7(左)ボードウォークを設置したイメージ図1(右)イメージ図2

手段2) 川際に建っている建物の容積率移転

都市計画区域内の一部の許容容積率を放棄し、放棄した分の容積率を区域内の別の場所に加算することが出来れば有効だと考えられる。これは、東京駅再開発で用いられた手法である。

- ・都市河川を、現状でも様々な形で利用できるようにする。日本橋川では現在、NPOが定期的に写真-7に示すように、シーサイクルやミニボート等の体験会を開催している。



写真-8(左)シーサイクル (右)ボート体験会の様子 (2006年11月に開催された東京リーバーフロントフェスティバルにて)

5. 今後の展望

川と都市とのリバーウォークの繋がり、リバーウォークの形状、都市とのアクセス、水面利用(舟運)との関わり・連携等、川からの都市再生シナリオについて検討を進めていきたい。

<参考文献>

吉川勝秀、河川流域環境学、2005年、技報堂出版(株)